

〈談話室〉

〈ショート・バージョン〉  
でのおもしろさ

「レキシントンの幽霊」

大高知晃

(三省堂国語教科書編集委員)

ものが基本形で、『群像』の「創刊五十周年記念号」には、四三名の作家の創作特集・四本の対談特集・総目次などが掲載されるといふ紙幅制約があつたため、〈ショート・バージョン〉の形ができあがつたものと推測される。教科書本文は、教科書自体の量的な都合もあつて〈ショート・バージョン〉を採用した。

「レキシントンの幽霊」の話柄は以下の通り。レキシントンの古い屋敷に、ピアノの調律師ジェレミーと暮らしているケイシーと知り合った「僕」は、半年後、留守番を頼まれる。深夜、物音で目を覚まし、それはパーティーをしているように聞こえ、やがて「僕」は、それが幽霊なのだと思う。「僕」は、その半年後に老化したケイシーと出会い、ケイシーは眠りの儀式について話し始める。「僕」は時々レキシントンの幽霊について思い出すが、それが遠いできごとのように感じられ、奇妙に思えない、というものである。〈ロング・バージョン〉には、「僕」とケイシーとの出

村上春樹の「レキシントンの幽霊」には、雑誌『群像』(一九九六年一〇月号)に掲載された〈ショート・バージョン〉と、一九九六年一月に短編小説集『レキシントンの幽霊』(文藝春秋)として単行本化された際の〈ロング・バージョン〉とがある。本来は〈ロング・バージョン〉で書かれた

会った経緯(ケイシーが意識的に接触してきたこと)、ケイシーが父親から継承した古い屋敷や膨大なレコード・コレクションについての具体的な描写(特殊な時間性や記憶装置として機能が暗示されていること)、同居人のジェレミーや飼犬のマイルズについての説明(ケイシーとの関わり方という点で両者は重なり合い、ジェレミーの離反の原因について考えるための情報が盛り込まれていること)などが記載されており、〈ショート・バージョン〉にはないドラマや風景も浮上してくる。ただし、当然のことながら、物語の根幹を成す、「僕」とケイシー、ケイシーと父親、ケイシーとジェレミーとの関係性については基本的に一致している。明らかに〈情報量〉が不足している〈ショート・バージョン〉ではあるが、そうした〈ショート・バージョン〉なればこそのおもしろさも生じてくる。例えば、個々の人物の形影や履歴が臙化されていることで、それぞれの人物像や言動が謎めくという効果のみならず、語り手である「僕」の屋敷やケイシーに対する不可解な思いがより増幅される形で読み手に伝わってくるのである。また、ケイシーの思惑や性向がほとんど示されていないこともあって、一つの現象に関わった「僕」という人物の思考や感覚が直截に読み手に届いてくるのである。教室という空間において、限定された時間で、共に読み解くような場合、〈ショート・バージョン〉は、「レキシントンの幽霊」の本質的なおもしろさを効果的に引き出してくれるものとなっている。

おおたか ともじ 中央大学附属高校教諭。中央大学文学部講師。